

父との最後の日々

父の追悼記念号を企画していただいていると聞き、大変うれしく思います。多くの方々の心の中に父との会話であったり、表情であったり、父が生きていたその瞬間瞬間が切り取られて残っているということは残された私たちにとって大きな喜びです。

父は、阪神淡路大震災の2年後、肺がんと診断され、その後14年間、がんと闘ってきました。中公新書「排出取引」を完成させたころには、4度目の手術後の経過が思わしくなく、肝臓に転移したことを元氣なく話していました。その一方で「次の本を書くための資料集めをしなくては」と、次の構想を練っている楽天的な父らしい一面も見せていました。

私は仕事のことでよく父に相談を持ちかけていました。学校経営にミドル層を核としたマネジメントを取り入れたいと相談したところ、マードック大学の論文にヒントがあることを教えてくれました。その後数年間、気になったまま放置していた論文を正月休みに手を貸してもらうことにしました。その後、メールやFAXでアドバイスをもらいながら、「ミドルアウト・マネジメント」という新しい考え方を読み解いていきました。途中、ちょっとした行き違いで必要のない部分を訳していたことが分かった際は、「貴重な時間を無駄にしたなあ」と厳しい口調だったことを思い出します。自分に残された時間が少ないことを知っていたようでした。

3月20日、見舞いに行った際、ちょうど人事異動の発表があり校長昇任を父に伝えることができました。ベッドから右手を差し出し、「おめでとう」と言ったあと、すかさず「偉そうにするなよ」と言いながら握手をしてくれました。父の生き様が凝縮された言葉のように聞こえ、遺言と思って忠実に守っています。

3月21日、「おかげで和訳が完成したよ」と職場から電話で伝えました。「よかった、よかった」という返事が耳に残っています。その後の父の最期の言葉は妹から聞きました。意識がもうろうとする中、「『最後までやりはったら』って言いはったから、やりはってん」と、誰かと会話していたかのような、また、自分の行為を俯瞰しているかのようなつぶやきだったそうです。最後の最後まで、貴重な時間を割いてもらい感謝の気持ちで父との思い出を締めくくることができました。

2011年10月31日

天野 比左志